ナンセンス・ラフスケッチ

十三

〔食卓〕

食卓には三人分の料理が並んだに違いない。

「朝ごはんの時間よ」

母親の声と共に家族が食卓までやって来る音がした。

「今日もうまそうだ」

父親がそう言いながら席に座ったようだ。続いてもう二人、椅子に座る音。

「いただきます」

三人揃って声を上げる。

「今日もうまそうだなあ」

箸を使って何かを切り分けるカチ、カチ、という音が聞こえた。

「やっぱりお母さんの目玉焼きはうまいなあ」

「いつも通りの味付けよ」

「じゃあ食材がいいのかもしれないな。もちろん、お母さんの味付けがあってこそだけどね」

妻をほめる夫の声に交じって、コツコツとノックのような音が響いた。

「シンくんダメよ、目玉にお箸を刺すなんて」

「だってこうしておしょうゆかけたらとてもおいしいんだもん」

「行儀が悪いぞ。やめなさい」

はあい、とふてくされた声が返事をした。ゴリゴリとすり鉢で何かをすりつぶすような音がして、汁物をすする音が響いた。次いで、何かを口に入れた音が聞こえた。

「本当に今日はうまいよ。味噌汁はとても濃厚だし、このたらこもとてもうまい。ちょっと食べてみてくれよ」

しばらくの沈黙の後、妻が答えた。

「本当ね。私のより脂が乗ってて、とてもおいしいわ」

「ぼくもたべるう」

「はいはい、どうぞ」

突然、鈍い音が響いた。続けて、ぼたぼたと液体が床に落ちる音。

「あらあらシンくん、器を倒しちゃったねえ」

「ごめんなさい」

「味噌がこぼれたな。拭かなければ」

太鼓が規則正しく打ち鳴らされた。おそらく布巾を取りに行ったのだろう。やがて再び太鼓が叩かれた。席から立って、と言う母親の声と椅子が床をこする音がしたのは同時だった。

「さて、食事に戻ろう」

布巾を台所に戻したであろう父親はそう言って席に戻ったようだった。

「ごはんが少なくなっちゃった」

「お母さんの分をあげるよ」

「ありがとう」

「お父さんはこのたらこをあげよう。ただし、この耳を食べてからだ」

ええー、と不満げな声がこだまする。

「文句を言うな。それに、食べ物は大事にしなきゃいけないぞ。好きなものだけじゃなくて、嫌いなものも食べなさい」

「でもぉ、耳ってちぎりにくいしなかなか食べれないよ」

「じゃあ、がんばった子には、お母さんがこのタンをあげる」

「ほんとに？　じゃあがんばって食べる！」

そう言うや否や、咀嚼する音が響いた。

「おお、食えたじゃないか」

「えらかったね。じゃあ約束通りごほうびをあげる」

「やったあ！」

嬉しそうに、子どもが歓声を上げた。
「よく頑張ったな。今日のたらこはうまいぞぉ」
「はい、どうぞ。シンくん、はなの和え物も忘れずに食べてね」
「わかってるよ」
しばらく、会話なしで食事が進んだが、不意に、
「そういえばあなた、仕事は上手くいってるの？」
「ああ、ボチボチってとこかな。ちょうど最近、○○商事との間で取引が成立したところだよ」
「それってあの大手の会社の……？　すごいじゃない」
「まあね。そろそろ出勤一時間前か。のんびりできないな。ごちそうさまでした。今日もおいしかったよ」
「ありがとう」
「ぼくもごちそうさま！」
席から立ちあがる音がしたとき、母親が言った。
「器はちゃんと片付けてね」
「わかった！」
グドン、と爆撃音が二つ続けて起こった。
「さて、出勤の準備をしようか。……そういえば、食材の残りはある？　帰りにかって来るよ」
「ありがとう。ちょっと地下室を見てくるわね」
マグマが地の底から噴き出すように、徐々に足音が大きくなっていった。

〔抹殺〕
今日、そいつはやって来た。
「おお、来たか。今回も頼みたいのだが――」
「了解しました。それでは……」
ここはある大物政治家の事務所。私はその秘書を仰せつかっている。
今先生と話している、すらりとした長身の二十代後半くらいの青年は、数年前からここを出入りしている先生のお抱え便利屋だ。こいつの仕事はとにかく先生にとって不都合な事実を隠蔽することである。行きつけの風俗店での一部始終を収めた週刊誌記者の証拠写真の隠蔽から、警察の掴んだ裏金工作の証拠までをも隠蔽する。それどころか人殺しすらも行ったらしいのだが、この便利屋は今まで行った隠蔽全てが完璧すぎて露見していないところが不気味だった。隠蔽の方法さえも隠蔽しているがごとくの手法に先生は一目を置いていた。
「今回はこいつを消して欲しいのだが」
そう言って先生が提示したのは一人の写真だった。
「先生の政敵の一人じゃないですか」
私が口を挟むと先生は黙れ、と低い声で命じた。
「こいつの言った通り、わしの政敵、それも最も憎き奴だ。わしは幾度となく奴に陥れられた。今後もわしの邪魔をしてくるに違いない。だから君に奴の抹殺を依頼する。一切の証拠も残さず消してくれ。勿論礼なら弾む」
「行方不明で処理する、ということでよろしいですか？」
「ああ、それで頼む」
そいつは、了解しました、と感情の読めない声で言った。
「いつ頃がよろしいですか」
「そうだな、今週中に、くれぐれも気づかれないように消してくれないか」
了解しました、とまたこいつは言った。それでは、と彼は事務所を出て、夜の闇へと消えていった。
「いつ見ても不気味ですね。しかもどう処理をしているか全くわかりませんし」
「しかし有能だ。お前もあれくらい使えればな」
私は肩を落とした。どうせお前は私設秘書の一人に過ぎないと言わんばかりの口ぶりだった。
「もう帰ってもいいぞ」
失礼します、と言って私は事務所を出た。時刻は十時三十三分だった。外に出てため息をつく。確かに私は役立たずだが、それでもまじめに仕事をしている人間の一人だ。むしろ積極的に汚いことをしている先生のような政治家のほうが余程醜悪じゃないか。
少し飲んで帰ろう。私は近くの繁華街へ足を向けた。適当な店に入り、日本酒と焼き鳥を注文する。居酒屋はそれなりに繁盛しており、私はぼんやりと店内を眺めつつそれらをゆっくりと食べた。食べながら今日の事を思い返す。いくら何でも先生に匹敵するくらいの大物政治家を証拠も残さず抹殺するのは不可能じゃないか？　あいつはどうするつもりなんだろうか？
適当なところで勘定を払って店を出ると、既に次の日になっていた。早く帰ろうと駅に向かっていると、
「おや……？」
駅から住宅街へ向かう一人の老人がいた。あれは今回先生が抹殺を命じた政治家ではないか？　今頃帰宅しているとは結構忙しい日だったのだろうか。
ふと、「今週中に消す」ということを思い出して、私は少し考えた。このまま彼についていけば、あいつの手法がわかるのではないか？　別に邪魔立てするつもりはないが、あいつがどう任務を遂行しているのかは気に

なった。
　ゆっくりと歩く政治家の後について、私は尾行を始めた。繁華街とは違い街灯がぽつぽつとしか灯っていない静まり返った街を、私は足音も立てずに歩いた。相手はまだ気づいていないようだ。しばらくまっすぐ歩いて、老政治家はを左へ曲がった。私も後を追って急ぎ足で左に曲がる。
　私は目を見開いた。そこに老政治家の姿はなかった。代わりにいたのは、
「あいつ……」
　くるりとそいつはこちらを向いた。まさかあの一瞬でもう仕事を終えたのか？　私がそう思った瞬間、
「見ましたね？」
　視界からそいつは消えて、私の背後から声が聞こえた。私はぞっと背筋が凍る思いがした。しかし、どうにかか細い声で、見ていない、と言った。
「では、少なくとも、私の姿は見たでしょう？」
　無感情な声で、嘘をつくなと言わんばかりのことを言った気がした。私は震える身体をどうにか抑え、うなずいた。
「では、あなたも消えてもらいましょう」
　そいつは私の背中を背後の塀につけた。
「ま、待ってくれ、わ、私は今日君が会った先生の秘書だぞ、消すとどうなるか――」
「昨日、の間違いではありませんか？　それに依頼者は『くれぐれも気づかれないように』と指定しました。よって誰も見ていないことが絶対条件なのです。たとえ依頼者の部下でもね」
　異常だ、そう思った。この場で私も殺されるのか。
「あなたのことは依頼者の敵の密通者だったということで処理しておきます。ああ、痛みはありませんよ。あと、殺しもしません。文字通り消えて頂くだけですから」
　どういうことだ。やっとのことで私は声を出した。
　こういうことですよ。そいつは私を塀に押しつけた。
　途端に、私の身体は塀に吸い込まれた。そいつの薄ら笑いを浮かべた顔が月明かりに照らされる。私はそいつに手を伸ばそうとしたが、壁を殴ったようにはね返された。私はどうにかここから出ようと壁を蹴ったり、叫んだりした。
「喚いても暴れても無駄ですよ。外の人には聞こえませんから」
「おい、ここから出してくれ」
「出しませんし、出られませんよ、私が状況を解除するか、私自身が死ぬかしない限りね」
　何てことだ。こうやって依頼を遂行していたのはわかったが、自分自身が同じように消されるとは。
「ではごきげんよう」
　待て、という声を無視して、そいつは地面に消えた。私は一人取り残された。一体どうすればいいんだ？　その場で頭を抱えた。
「ひょっとしてあなたは強欲なあの政治屋の秘書の方ですかな」
　突然、右から声が聞こえた。振り向くと、そこには消えた老政治家の姿があった。私は返事にためらったが、やがてうなずいた。
「やはりそうでしたか。自分の部下にまで手をかけるとは、何という私利私欲の塊でしょうか」
　演説のような口調でそう言って、老政治家は続けた。
「ここから脱出する方策をよろしければ共に考えませんか。一人より二人のほうが良い案も出るかもしれません」
　私はその提案に飛びつこうとしたが、もしかしたら先生の計らいでここから脱出できるかもしれないと思い、こう言った。
「しかし、良いのですか？　私はあなたの政敵の部下ですよ。何か不都合が――」
「別に不都合なんかありませんよ。それよりあなたのほうが気の毒です。信じていた上司に裏切られてこのように閉じ込められてしまったのですから。しかしそんな細かいことよりも、今はここから出る方法を模索しなければなりません。いかがですかな、あなたにとって悪い話ではないでしょう」
　私は少しためらったが、ようやくうなずいた。今はこの人について行こう。ひょっとしたらすぐにここから出られるかもしれない。もしあいつが私を助けに来るようなことがあれば、私だけ脱出すればいい。老政治家はうなずいた。
「ではまず、我々の出来ることを見定めなければなりますまい。とりあえず、歩いたり、しゃがんだり、泳いだりは出来るようですが、あなたは気づいたことはございますか」
「泳ぐ？」
「ええ、地面は泳いで移動できるようです。犯人があなたの方へ向かったとき、どうにか向こうへ行けないかとしゃがんでみましたところ、地面に沿って手を伸ばせることがわかりまして、そのまま身体を地面に沿わせると、泳いで先へ進めることがわかったのです」
「私は、壁を殴ったり蹴ったりしましたが、びくともしませんでした」
「つまり物理的に壁を越えるのは不可能、ということですな。壁を殴ったと言いましたが、痛みはありましたか」

「そういえば、抵抗感だけで痛みはありませんでした。それにあいつは、喚いても外の人間には聞こえない、と」
「なるほど、助けを求めるのも不可能ですか」
「その通りさ」
突然、左の方から声がした。見たところ私と同じくらいの年齢の、ひげを生やした男だ。
「あなたはどちら様ですかな」
「あの政治家の暴露記事を書こうとした雑誌記者だよ。もう五年くらいはここに閉じ込められている」
「そうでしたか。どうにか脱出する方策を一緒に考えませんか」
「いや、俺も色々やってみたんだが、無駄だったよ。それより被害者同士、楽しいことをしないか？　意外とこの状況、面白いことができるぜ。他にも被害者がいる場所を俺は知っている」
どうしようか、と私が老政治家に顔を向けると、
「とりあえず他の人に会わせて下さいませんか」
「いいぜ。ついて来な」
私たちは雑誌記者の後について行った。彼は繁華街の方角へ泳いで向かった。泳ぎは高校以来やっていなかったが、案外楽に泳げる。私は土と濡れたアスファルトの臭いを嗅ぎながら進んだ。
「そうだ、お前さん達、腹が減ってないか？」
大して空腹感はないが、何か食べるものがあるならもらった方がいいかもしれない。私は肯定した。
「実を言うとこの中では生理現象が起こらなくなっているらしい。だから腹が減ることも、喉が渇くことも、便意なんかもない。だが、こんなことが出来るんだ」
繁華街に着くと、彼は居酒屋に入っていった。するとそのままテーブルカウンターを垂直に上がって、上から、
「ここまで来な」
と私たちを呼んだ。私たちも後をついてカウンターの壁に張り付いた。
「こうやってのけぞるんだ」
そう言うと彼はカウンターのテーブル部分に肩まで差し入れた。私は、こんなことできるものか、と思った。
「きつくはありませんか？」
老政治家が彼に聞いた。
「大丈夫。爺さんでもできる。身体がどんなに硬くてもできるぜ」
不審に思いながらも同じようにのけぞってみる。自分でも驚くほど柔軟に、それこそ布のように身体が曲がった。
「よし、できたな。そうしたら、皿の真下に入り込むんだ。そしてテーブルと皿が接しているところから顔を入れてみろ」
ぐにゃりと彼の顔が皿の高台に沿って歪んだ。そうして皿の表面に顔を潜り込ませた。何がしたいのかがわからぬまま、私と老政治家は別の皿に顔を埋めた。途端に焼き鳥の匂いが鼻を衝いた。
「準備はできたか？　それじゃそのまま皿の表面を舐めてみな」
まさか味がわかるのだろうか。恐る恐る舐めてみた。すぐに口いっぱいに炭火で焼いた焼き鳥の味が広がった。私は驚きつつも、それをじっくりと味わった。ねぎまの真下を隅から隅まで舐め回す。焼き鳥の旨味が凝縮されているようでとてもうまい。
「どうだ、すごいだろう？」
いつの間にか隣にやって来た雑誌記者がそう聞いてきた。私は、ええ、とうなずいた。
「これを使えば酒も味わえるぜ。だが、まず仲間のところに行かないとな。ついて来てくれ」
雑誌記者は居酒屋を出て、駅の方へ泳いだ。私たちも泳いでついて行く。彼は駅の線路の真下をくぐり、バスターミナルに入った。手近なバスに近づき、
「バスに乗って終点まで行く。この車輪に入るぞ。タイヤの表面に張り付くんだ」
雑誌記者は地面を泳いで車輪の下まで行き、接地した部分からタイヤにエビぞりで入り込んだ。
「やってみましょうか」
老政治家が同じ要領で二つ目のタイヤに張り付いた。私も別のタイヤに入り込む。普通なら見ることのできないバスの下がよく見えた。
やがてバスが走り出し、私はごろごろと回る車輪の表面で目まぐるしく変わる光景に目を回しかけた。ようやく目をつぶっていれば目を回さないことに気づいたときには、既に終点まで着いていた。
「さあ、ついて来てくれ」
駅前の賑やかな繁華街を通り過ぎて、彼は歓楽街の方まで泳いで行った。いわゆる「魔性の街」と言われる地区だ。
「ここでちょっと仰向けになってみな」
くるっと反転して私は上を見た。途端にまぶしい光が襲いかかった。おお、と感嘆の声が老政治家の口から洩れた。私は歓楽街の光景に目を奪われた。
上を通り過ぎる人々を眺めながら、私は歓楽街の大通りとして四方の建物からの光を一身に浴びていた。私はまぶしい光と、地面に染み込んだ酒と香水の臭いでくらくらしそうだった。
「地面から見る景色も乙なものだろ。そろそろ行くぞ」

私たちは彼について行って、賑やかなビルの麓にやって来た。二十メートル程はありそうな高さだ。
「よし、ここを登るぞ」
老政治家も私も顔を見合わせた。
「ここを登るのですか」
「大丈夫だって。重力の影響は受けないから」
そう言うと雑誌記者はビルの壁にへばりつき、ヤモリのように上へ登って行った。私たちも同じ要領で上へと登る。確かに下には落ちて行かなかった。
するすると彼は手早くコンクリートの壁を上へ進んで行く。私はそれを追いかけながら、どんどん上がっていく高度の中、光り輝く街を見下ろした。煌々と輝く街の明かりは夜の闇をより一層際立たせ、街そのものを輝かせていた。
「まだ着かんのですか?」
「もう少しだ。ほら、ここから三番目の窓から中に入る」
彼は右に横移動をして窓に張り付き、窓ガラスに入り込んでビルの中に入って行った。彼について入って行くと、ほの暗い部屋の壁に何人かの男が張り付いていた。部屋に入った途端、老政治家が声を上げた。
「おや、あなたは――」
「おお、あんたか!」
部屋の奥にいた老人が立ち上がり、老政治家と抱き合った。
「おやっさんの知り合いかい?」
「ああ、わしと同じ政治家だ。奴を打倒するために同盟を結んでいた」
「行方不明だと聞いておりましたが、まさかあなたもあの政治屋の毒牙にかかっていたとは」
「そうとも、姑息な野郎だ」
こうして二人が話している間に、私たちの周りには数人の男がやって来た。雑誌記者は、そろそろ自己紹介をしようじゃないか、と言った。私と老政治家から順に自己紹介を始め、前からいた男たち――医者、老政治家の盟友、大学教授、大手会社の（元）社長――がそれに続いた。全員先生に関わったことで消されたと報告した。一通りの自己紹介の後、医者が私に話しかけた。
「あなたはあの政治家の秘書の方ですか。まさか奴も自分の仕事仲間をも消そうとする奴だったとは。心中お察しいたします」
私は苦笑いをして考える。そう言われてみれば今までずっと下っ端だの雑用だのと言われ続けて、自分の仕事ぶりを認めようとしない態度に腹が立ってきた。おまけにこうして自分を世間から消して一人楽しんでいると思うと怒りがマグマのようにあふれ出すのを感じた。
「よし、新しい仲間が加わったから酒盛りでもしようじゃないか!」
雑誌記者――この中で最も古株だとわかった――がそう言うと、皆がおお、と返事をした。そしてまたビルの壁をよじ降りて、眠らない街へと繰り出した。
「だからあいつぁーよぉ! いけ好かねぇやろぉだからよぉ! とっとと殺しちまうべきだったんだよ!」
「ああ、わしが決断できんばっかりに、お前も巻き込んでしもうたなぁ」
ここは歓楽街の暴力団経営のバーだ。私たちはそこに入ってビンごと酒に顔を浸していた。ビンの底から顔だけを侵入させ、酒ビンの内側に入って談笑する。医者が口を開いた。
「ちょっと飲み過ぎていませんか?」
「やかあしぃ!」
「大丈夫じゃ、そっとしといてやってくれ」
「まったくどいつもこいつも!」
「……すごいですね、あのおじいさん」
私の隣で飲んでいる大学教授に私はうなずいた。それにしてもあの丁寧な言葉遣いの老政治家が、こうも酒癖が悪いとは思わなかった。今は盟友相手に大声で愚痴をこぼしている。店の人にばれないかと最初は気が気でなかったが、どうやら喚いても外の人間には聞こえないというのは本当らしかった。
「あなたはあの強欲政治家の秘書だったそうだが、何か知ってることはあるかね?」
元社長が私に話しかけた。
「いえ、私は一介の私設秘書の一人でしたし、知っていることと言えばいかに悪徳だったかということくらいですよ」
「構わん、それを肴に飲もうじゃないか」
そういう訳で私は悪人の横暴ぶりを延々と二人の前で話し続け、大いに盛り上がった。やがて医者が加わり、政治家二人がそれに加わった。私は酒のせいもあり、いささか饒舌に話し続けた。
「おう、盛り上がってるな」
つまみを味わってくると言って席を離れていた雑誌記者はそう言って戻って来た。
「うまい酒だろ? 偶然見つけたんだけど、これかなりの高級酒らしいからな」
それをタダで味わえる私たちの状況は愉快だった。思わず声を出して笑ってしまうくらい愉快だ。
「な、楽しいだろ? 飯も酒も味わい放題、映画も見放題、他にも何だってできるぜ。まあ色々楽しんでくれ」

こうして私たちはどんちゃん騒ぎを日の出まで続けた。生理現象が起こらないのは本当らしく、眠気も感じることがなかった。そして私たちはそのまま街へと繰り出していった。

ここに来て一週間ほどが経った。もう歓迎は終わり、私たちは各自で好きに動いていた。

「さあ行こうか」

今日は大学教授と医者と一緒に行動することにした。向かった先は雑誌記者に教えられたこの地区最大の風俗店。早速入ると絨毯に染み込んだ女の匂いにむせ返りそうだった。

「おっ、あっちへ行ってみましょう」

大学教授が階段を指差した。私たちは蛇がうねるように上って手近にある個室に入り込んだ。そして床から壁へと身体を移し、室内を一周した。

室内は主に浴室とベッドルームで構成されており、今ちょうど女が浴室を使っているようだった。私たちは壁を伝って浴室内に入った。

女はちょうどシャワーを使っている最中だった。湯煙に包まれた浴室内で女の身体がぼやりと見える。私たちは目を凝らして一挙手一投足を見つめた。しばらくして私は鏡の方に回り、鏡を見つめる女をまじまじと観察した。

やがて浴室から女が出て行った。私たちは餌を追いかける肉食獣のように追いかけた。ベッドルームには男が待っており、女について私たちはそこへ入った。ベッドの左手の壁にまず私たちは陣取って、二人の様子を舐めるように見つめた。しばらくすると二人共べったりと身体を密着させて我々に背中を向けた。私はこの時点では十分興奮していたが、大学教授はそれでは物足りなかったのか、壁をよじ登って天井に張り付き、上空から観察をし始めた。

「ベッドに行きませんか？」

医者からそう提案されたので私も行くことにした。床を泳いでベッドの下に来ると、丈夫そうな脚からベッドのシーツに入り込んだ。医者はそのままヘッドボードまで移動してそこから二人を観察したが、私は二人の下に潜り込んだ。汗に蒸れた臭気と人肌で温められた布の感触が私を襲った。あまりの心地よさに眠ってしまいそうだった。

やがて女がベッドに寝転がり、男は起き上がった。女はまだ下着を脱いでいない。私はふとした思い付きで、下着に顔を突っ込んだ。甘い匂いが顔中を包み込んだ。心臓の鼓動は非常に速く、強くなったのを感じた。私はこの上なく背徳的な状況に笑いが抑えられなかった。そして熱と匂いと湿気が支配する檻を満喫しているとき、突然にパンと音が聞こえた。

途端に私は後頭部を締め付けられ、全身に重さを感じた。男の悲鳴がどこか遠くから聞こえた気がして、そして大きな揺れが続いた。次の瞬間に私は頬に平手打ちを喰らって女の尻に顔を埋めていた。そして束の間の静寂の後、甲高い悲鳴に私の耳が蹂躙された。

女が私からどいたとき、私は周囲を見た。大学教授は床で額を抑えていて、医者はいつの間に移動したのかベッドの頭側の壁から転がり出ていた。ベッドのバックボードの角には血の跡がついており、ここに大学教授は頭をぶつけたようだった。

直ちに私たちは住居侵入罪と強制わいせつ罪で現行犯逮捕された。刑務所での取り調べの最中に、私は政治家二人が居酒屋で発見されたことを知った。どうやら居酒屋のカウンターに突如として現れたらしい。二人共背中の部分で脊椎損傷を起こしたらしい。大方あの歪んだ体勢で酒を飲んでいたのだろう。そしてしばらくしてから、私の元雇い主も収賄容疑、証拠隠滅容疑などの様々な罪状で緊急逮捕されたことを知った。彼の場合は突如として特捜部の担当検事の机に現れた証拠書類によって逮捕状が出たらしかった。元社長は高級寿司店のまな板の上でマグロまみれになって発見されたらしいが、悪徳政治家に対する贈賄容疑で再逮捕された。これらの事件は行方不明だった人物の思いがけない発見、悪徳政治家の突然の逮捕とその政治家の秘書である私の存在、何よりそれらが同日ほぼ同時に起こったこともあり、非常に不可思議な事件としてマスコミが騒ぎ立てた。

かくして私たちは社会的に抹殺されたのだった。

〔影のひとり歩き〕

ある朝起きると、なんだか体に異変があるんじゃないか、と思った。別に、体調が悪いだとか、気分がすぐれないだとかではない。漠然と、何かが体におこったように感じた。でも、それが何かはわからない。

何だかわからないモヤモヤ感を抱えながらも、わたしは朝食を食べた。味覚は正常らしいことが分かった。異変は別のところで起こっているらしい。あるいは、ただの思い込みなのかもしれない。とりあえず、わたしはそのことをなるだけ考えないようにした。

日曜日ということもあって、わたしは家でダラダラと過ごしていた。しかし、午後になって、無性に外に出たくなったので、外出してみようと思った。

外に出ると、太陽がのどかに歌ってでもいるかのような陽気で、ちょっとその辺をブラブラとふらつこうと思った。わたしは近所の本屋に二時間ほど寄って、外に出た。すでに陽は傾いていた。

通りに出てしばらく歩くうち、通行人がわたしをジロジロ眺めているのに気がついた。何だろう、と思ってわたしは通行人の視線をたどって――そしてギョッとした。影がキレイさっぱりなくなっていたのだ。わたしは驚き慌てて、物陰に隠れた。

いくらか落ち着いて、冷静になって、わたしは何があったのかを考えた。影がなくなっている、こんなバカなことがあるだろうか？　もう一度物陰から出てみた。だが、やはりない。わたしの影はなくなっていた。

これ以上外にいる気も失せて、わたしはトボトボ家に帰った。歩きながら、わたしは影がなぜなくなったのかを考えていた。

家に着いて、ふと、わたしの影はどこへ行ったのだろうか、と思った。心当たりすらない。捜すにしても、わたし一人でできるとは到底思えない。だが、こんなことをまともに受け止めてくれる人は、はたして何人いるのだろう？　そもそも、影がそのあたりをほっつき歩いている保証もないのだ。ここから遠く離れたところにいるかもしれないし、ひょっとするとわたしの影はこの世界から完全に消えているのかもしれない。

結局、わたしは決断のつかないまま、夕食を食べて、寝ることにした。明日になれば元通り戻っているかもしれない、と思いながら。

翌朝、わたしは電灯の下に立ってみた。何も変わっていなかったので、ガッカリした。月曜日なので出勤しなければならず、わたしはできるだけ人ごみに紛れるようにして勤め先に向かった。ありがたいことに、今日の仕事はデスクワークのみだったので、影がないことは何とかばれていないようだった。やがて退社時刻となり、わたしは家路につこうとした。ところが、どうしたことか、途中で自分そっくり、いや、瓜二つの奴に出くわしたのだ。しかも、隣に知らない男を連れている。怪しいと思ったわたしは、跡をつけてみることにした。

彼らは、しばらくビルなどの陰を歩いて、近くのレストランに入った。わたしは、レストランに入らず、外で見張ることにした。

彼らを見張っていると、わたしのすぐ近くに、そのレストランをじっと見ている男がいることに気づいた。サングラスをかけており、表情は見えなかったが、なんだか怪しかった。

一時間ほどすると、彼らは、レストランから出て、通りをまっすぐ歩いて行った。わたしはその跡をつけていった。五分ほど歩くと、彼らは角を左に曲がった。見失わないように走って追いつこうとしたら、誰かが後ろからぶつかった。振り返ると、さっきわたしのそばにいた男が――

「あっ！」

二人同時に声を上げた。男の顔は、わたしそっくりの奴の隣にいた男そのものだった。

その瞬間、わたしは足が引っ張られるように感じた。そして、体の自由が効かなくなった。目には明るさが感じられるが、何も見えない。なぜか自分の意思に反して、体が動いた。右手が太もも辺りから何かをつかみ、わたしの指がその物体のあちこちを触る。そして、操られるままわたしはその物体を耳に近づける。

上のほうで、わたしそっくりの声が――いや、わたしの声そのものが――こう言った。

「分離実験は成功した。……二人でやって、どちらとも。……そう、コンピュータを使って影に記憶を書き込んで――」

〔虹の先〕

研究の結果、わたしは虹の上を走る技術を身に着けた。思えば長い道のりだった。虹はなかなか出ないので、雨の降る土地と聞くとどこへでもわたしは行った。幸いなことにテレポート装置が発明された現代だからこそ、虹が出たというニュースを聞いていち早く現場に駆け付けることができた。もしなければもっと、いやひょっとしたら全く研究が進まなかっただろう。

子どもの頃に虹の先に何があるかを知りたいと思ってもう二十年以上も経った。テレポートを使っても知りえなかった謎がついに明らかになるのだ。わたしは胸が高鳴った。

技術を身に着けてから半年後、ついにその時は訪れた。わたしは虹が出たというニュースを聞くや否や、すぐにテレポート装置に飛び乗った。現地に着くと、自宅とわたしを繋ぐ通信機器もセットした。これで準備は万端。後は虹に飛び乗ってその先へ行くだけだ。

わたしは靴を脱ぎ、虹に向かって走った。そして虹に対して宙返りをしながら飛び込んで、足の指で虹をつかんだ。一歩一歩しっかりと握りながら重力に逆らって走り続けると、徐々に身体が軽くなっていった。逆さまに見える地面をちらりと眺めつつも、わたしは紫色の路面の先をしっかりと見据えた。前方にある雲の中を通過する。虹はまだくっきり出ていて消えていない。わたしは雲の中をさらに先へと走った。

不意に、紫色の道が緑色に変化した。何か失敗したのかと思う間もなく、わたしは白い地面に立っていた。

目の前に広がっていた光景に目を奪われる。大小様々、最も大きいものは五百メートルほどもあろうかという緑色の竜たちが百匹以上も集まって、何十メートルもあるであろう大酒樽を囲んで酒盛りをしていた。

「おや、珍しい。異種の客だ」

わたしは食われるかもしれないという恐怖から一目散に逃げようとしたが、竜の尻尾にからめとられた。

「なに、取って食いやせん。折角来たのだ、酒を振る舞ってやる」

とんでもないものに巻き込まれてしまった。しかしここで拒否しようものなら何をされるかわかったものじゃない。わたしは素直にうなずいた。

竜たちに案内されてわたしは一団の中に入った。直径十メートルほどの杯になみなみと酒を注がれて差し出される。少しなめただけで舌がしびれるほど度数の高い酒だった。とても全部飲めたものじゃない。

「ん？　どうした客よ。遠慮はいらないぞ、どんどん飲め」

こう言われては逃げようにも逃げられそうにない。わたしは覚悟を決めて酒を口につけた――

「お、気づいたか」

目が覚めると竜の顔がそこにあった。わたしは驚いて上体を起こそうとしたが、ひどい頭痛でそのままま横になった。横になっていた場所は案外柔らかかった。

「客は酒が弱いのだな」

傍らを見ると酒盛りが行われている。また始めたのかと思ったが、わたしは調査に来ていたことを思い出して背負ったリュックサックからビデオカメラと通信機を取り出した。

「……圏外、か」

多少は想定していたとはいえ、わたしは失望を抑えられなかった。それならば仕方がない。せめて映像を撮ってそれを持って戻ればいい。

（そう言えば、戻るのはどうすればいいんだろう？）

「あのう」

「ん、どうした客よ」

「この世界からわたしの世界へ戻るにはどうすればよいかご存知ですか？」

「そもそも、どうやって来たのだ？」

わたしは虹を走ってここへ来たことを告げた。竜はそれを聞くと、

「じゃあ話は早い。そのうち誰かが地面に潜って外の世界へ行くから、それに乗っていけばいいのだ」

よかった。案外簡単に元の世界へ戻れそうだ。わたしは彼に礼を言った。

「大丈夫そうなら、私は酒盛りへ戻るぞ」

「ええ。ありがとうございました」

竜は酒樽へと向かった。わたしは竜たちの酒盛りを映像に収めると、荷造りを始めた。

そのうち、一匹の竜が酒盛りの一団から離れてすっと白い地面に入り込んだ。わたしは虹に乗るときの要領で竜の背中に乗ると、先へと走った。無事に身体は地面を通過した。これで帰れる。わたしは内心安堵しながら走り続けた。

雲を抜けると逆さまになった地面が見えた。自分の乗った場所とは違うが、おそらくここが着地点だろう。紫色の路面を地面ぎりぎりまで走り抜けて、わたしは虹を蹴って宙返りして着地した。

着地したのは出発点の荒涼とした草原ではなく野原だった。なかなか快い風が吹いている。ここはどこだろうか。わたしは通信機で現在地を割り出そうとして、愕然とした。

「圏外……？」
　地球上だったらどこでもネットワークが発達しているこの時代にまさかネットワークが通じていない場所があるとは驚いた。少しむっとしたが、仕方がない。歩いて通信のできる場所を探そう。太陽の位置から方角を割り出して、わたしは歩き始めた。どこまでも木のない野原の広がる大地を歩いて、歩いて、歩き続けたが、建物どころか人さえも見えなかった。
　おかしい。もう三時間も歩いているのに動物すらも見つからない。わたしは言い知れぬ不安を抱えながら歩き続けた。やがて日が暮れ夜になったが、二つの月がある空を見てわたしは肝をつぶした。そして不安が確信へ変わった。
「ここは地球じゃない」
　だとしたらどうすればいいんだろう？　さんざん考えたが、結局虹を待つしかないという結論に達した。わたしは頭を抱えた。そもそもわたしは食料を数か月分しか持っていない。このまま行けば餓死か脱水で死ぬだろう。わたしは絶望した。二つある大きさも違う月がわたしを嘲笑う。それでも睡魔はしっかりやって来て、いつの間にかわたしは眠った。
　翌日、幸運にも朝一番に虹が出た。わたしは走ってまた竜たちのもとへ戻った。やっぱり酒盛りをしていた。
「おや、帰ったのではなかったのか？」
　竜の一人が出迎える。顔の区別はできなかったが、多分わたしを看病してくれた竜だろう。そのことは有り難かったが、わたしは文句を言った。
「元の世界へ戻れませんでした。本当にこの方法であっているんですか？」
「おかしいな、いや、そうか」
　少し困惑した声を出したと思ったら、すぐに納得した声を上げて、言った。
「お前の世界では、虹が珍しいのではないか？」
　わたしはうなずいた。
「ならば仕方がないな。なかなか帰りつけない可能性がある」
　どういうことか尋ねると、竜は言った。
「竜そのものが虹であることは気付いただろうが、我々がよく行く世界とあまり行かない世界があるのだ。どうやらお前は我々にとって珍しい世界からやって来たのだろう」
「そもそも、世界っていくつもあるんですか？」
「まさか知らないのか？」
　竜は驚いた調子で尋ねた。わたしはうなずいた。何か方法はないかと聞いたが、竜は首を振り振り、
「まあ辛抱強く探すしかないな。もし帰れる可能性が高まるとするなら、ひどく酔っている竜に乗るといい」
（ひどく酔っている竜？）
　わたしの表情を読んだのか、しばらくの沈黙の後、竜は口を開いた。少し長かったが、つまり、竜たちは酔い覚ましに外の世界へ行くので、深く酔っている奴ほど遠距離を飛んでいく、それに乗っていけば自ずと遠い世界へ行く可能性が高まる、ということだった。
「しかしわたしの世界を通る可能性は？」
「わからんな、何せ深く酔っている奴だから、どこへ行くにもふらふらしている。中には一つの世界を何周もする奴もいる。色々いるからどれが正しいかはわからん」
　わたしは肩を落とした。本当にとんでもないところに来てしまったのだということを実感して、暗澹たる思いだった。
「まあ、気にするな。それより酒盛りに参加せんか？」
「そんな気分じゃありません」
「なら仕方ないな。酒盛りはいつでもやっているから、好きな時に参加するといい」
「いつでも？」
「そうとも、毎日樽いっぱいに養老の滝から酒を汲んで休みなく酒盛りをしている」
　おかげでいつも酔っ払っているのか。おつまみは、と聞くと、
「あるぞ。口に合うならやろう」
　今はいいです、と断った。竜は酒盛りに戻った。わたしはしばらく、酒盛りをする竜たちを眺めた。こうなったら、全部当たってみるしかないとわたしは覚悟した。しかし、一方でどうにかなるだろうとも考えていた。竜たちは確かに自分の世界へ来た。ならばもう一度通過することだってできるだろう。わたしはそう考えて酒盛りから離れる竜を待った。
「また戻って来たようだな」
　うるさい、とわたしは返した。あれから何十回竜に乗ったのかわからない。しかし、自分の世界を通り抜けた竜は一つとしてなかった。何度かわたしが下りた場所は、虹だらけの世界だったり、おかしな形の機械人形しかいない世界だったり、水だけが重力に逆らって空にある世界だったりした。
「どうする？　今日はやめるか？」
　まだ行く、と返そうとしたが、足が震えるほど走り回っていたことを考え、しぶしぶうなずいた。虹をつかむだけの力がなければ、たちまち落下してしまうことは十分承知していた。

「まあ気を取り直して酒でも飲まないか？」
わたしは丁重に断って、ふて寝した。もうここへ来て数か月は経っている。なかなか帰れない自分に苛立ちを隠せなかった。
もう千回は超えただろうか。五百回を超えたあたりからわたしは回数を数えるのをやめることにした。無駄に回数を重ねていく自分が惨めだったからだ。そして百回を超えたあたりから、わたしは世界を通るときに通信機をかざして電波を受信すればそこが自分の世界ではないかと考え、それを実行していた。そうすることでわたしは出撃回数を大幅に短縮していた。竜たちは一度に複数の世界を渡ることが多かったからだ。
そしてわたしは紅葉した落葉樹の茂る森にいた。近くには廃墟があり、往時の存在を偲ばせる。
「何をしているんですか？」
「無意味なこと」
目の前に不思議な男がいた。わざわざ降りたのは、その男がその廃墟に腰を下ろして木々を眺めているのが見えたからだった。見たところ三十か四十歳くらいで、わたしが来ているスポーツウェアと違い、かなり目立たない普段着を着ていた。
「どこから来たんですか？」
「遠いところから」
こちらも見ずに男は答えた。わたしは続けた。
「このあたりのことを知っていますか？」
男は鬱陶しそうにこちらを見た。
「見たところ鬱蒼と茂った森が続いている。以前ずっと四時間ほど歩いたところに民家を見つけたが、住人は冬ごもりの季節だとかで地面に潜った」
そう言ったきり、わたしたちは黙り込んだ。やっぱりここは地球ではないようだ。
しばらくしてわたしが聞く。
「今までどこへ行ってきたんですか？」
「水浸しの星にも行ったし、岩だらけの星にも行ったし、火山が多く、常にどこかが噴火している星にも行ってきた」
「誰かのいる星には行かなかったんですか？」
「行ったよ。でも無意味だった」
そう言った後で、こちらを向いて男は言った。
「君は俺と同じく無意味なことをしているようだな」
その言い草にカチンと来て、わたしは返した。
「元の世界、故郷に帰るためにわたしは行動してるんです。あなたのようにただ木々を眺めているわけじゃない」
「それが無意味なんだよ。大体「世界」と君が言っているのはどの範囲だ？　この星が、君が行った世界が、俺が行った世界が一体どの範囲にあるか知っているのか？」
わたしは考えた。確かによくは知らない。でも、どうにか星々をしらみつぶしに探せば見つかるはずだ。
「何も知らないようなら教えるが、一つの宇宙どころじゃなくて、この世界は無限大の宇宙の中にある無限大の星々で成り立っている。はっきり言ってしまえば、君が一生かかっても全部は回れない、一生かけても全部見られないんだ」
わたしは目を丸くした。そんな世界を想像して、頭がくらくらしてしまった。
「なんでそんなことがわかるんですか？」
「〈虹の竜〉たちに聞けばわかるし、俺も旅を続けて同じ経験をした」
「〈虹の竜〉？」
「虹を辿った先にいる竜たちのことだ。彼らは養老の滝の酒を飲むことで異常な長寿を実現している。そしてその長寿の彼らが言うんだ。宇宙ごとに似た星が現れるが、その全てが互いに何らかの差異がある。俺も偶然似たような星を見つけた。どちらも同じような気候だし、同じような地形図だし、同じような人々が生活して、同じような世界情勢で物事が進んでいる。大きな違いは、片方は物体電送技術が確立していたのに対して、もう片方はそれがなかった、というだけだった」
わたしは目を丸くした。物体電送技術はつまりテレポートのことじゃないか！
「その話、詳しく教えてくれませんか？」
男は驚いた顔をしたが、色々と教えてくれた。世界地図のことから、どんな国があるか、どの竜に乗ったらそれが見つかったか、その他細々としたことまで教えてくれた。これで手がかりが見つかった。わたしは飛び上がりそうなほどだった。
「どうしても故郷に戻りたいなら一つ忠告しておく。養老の滝の酒を飲んだら寿命があの杯一杯ごとに三年延びる。ついでに老化も防げるようだから飲んでおいた方がいい。まあ無駄なことだと思うがね」
彼の忠告の末尾は無視してわたしは虹が消え残っている空へと走って行った。
「ようやく着いた……」
もう何回出撃したかはわからないが、ようやく通信機の電波が反応する世界へ足を下ろした。街並みはすっかり機械仕掛けの殺風景なものに変わっていたが、しかしここが自分の世界だと信じたい。わたしは降りた街の案

内掲示板から手ごろな店へと入って、世界地図を見た。間違いない。ここがわたしの世界だった。
「やった！」
思わず叫んだが、店には店員のロボット（と機械人形を別の世界ではこう呼んでいた）しかおらず、わたしの声はむなしく消えて行った。とりあえず、ロボットに聞いてみる。
「今日は何年何月何日？」
「本日は二八八一年十月十七日です」
やっぱりわたしの出発した時代より五百年も離れている。それにしても人間はどこにいるんだろう？　ロボットだらけだから、彼らが買い物を代行しているのだろうか？
「マンションの中にいるのかな？」
わたしはマンションに入り、手近なドアを叩いた。反応はない。別のドア。反応はない。次。反応なし。次。なし。次。ない。次。ない。
次の階に上がっても変わらず、何も反応はなかった。ひょっとして誰もいないのか？　わたしはさっきの店へと戻り、ロボットに聞いた。
「今日の世界情勢は？」
「穏やかな海のように落ち着いています」
「わたしは人間の客として何日ぶり？」
「日数で言うと七六二六四日、年月日だと二〇八年九月十七日ぶりです」
もどかしくなって、わたしは思わず大声で聞いた。
「この世界に、人間はいるの？」
ロボットは、単調に答えた。
わたしはビルの最上階から空を眺めた。虹は出ていない。わたしはそこから通信機を投げ捨てた。
結局ロボットたちに話を聞くと、みんな地球から脱して別の星々へと移住してしまった、ということだった。テレポート技術の発達の結果、もはや座標を打ち込まず、言葉だけで指定した場所へテレポート出来るようになったらしい。そしてその帰結として、政治家たちの暗殺、犯罪の増加、そして疑心暗鬼に陥った人々が、国家間の大戦争になる前に地球から脱出したらしい――それも、自分、あるいはその家族や親族以外は誰もいない星へと。そしてその帰結としてみんな地球からいなくなってしまったらしい。何とも皮肉な話だ。
都市機能や食品生産ラインはオートマチックに維持され、食料品のテレポート輸送サービスも確立されているので、みんな本質的には地球から離れられないらしいが、何かにおびえて他者とのかかわりを最小限にした結果がこれなら、地球の発展、真理の探究なんてものは何とも無意味なものじゃないか。
力なく笑うと、わたしはテレポート装置へと向かった。
「おや、また会ったな」
わたしは竜たちの話から男の居場所を聞き出した。
「あなたの言った通り、確かに故郷に戻るのは無駄でした」
そうだろう、とうなずいた。
「でも、こうしてあなたに会えたことで意味がありました。故郷に帰ることで、あなたの気持ちが何となくわかった気がするんです」
男は振り向かない。ただそこに立ち尽くしていた。
「だから、あなたの旅について行っていいですか？」
男はただ一言、こう言った。
「好きにしろ」
わたしたちは広大な野原と木々の生い茂る星にやって来た。
「旅の終着点としては上出来じゃないか」
男は言った。もうその声はしわがれて、往時の輝きはなかった。わたしは男に返した。
「終着点じゃなくて、出発点ですよ」
そうだな、と男は穏やかに笑った。わたしたちは空にかかる虹を見上げた。